

レ・クレドール・ジャパン プチツアー

根津美術館

2011年10月19日 11:00~12:30

参加者

小山明美 竹内郁代 田嶋 益美 桃井忍

講師

根津美術館 学芸課長 (Chief Curator)

白原由起子 先生

はじめに

根津美術館は実業家そして東洋古美術蒐集に熱心であった初代根津嘉一郎（1860-1940）の遺志によりコレクションを広く一般公開するために、昭和16年（1941）南青山の根津家私邸敷地内に開館。

根津美術館のつくり

3年前の平成21年10月に大々的な改装工事を経て再開館しましたが、この設計は隈研吾氏による設計で和の趣を基調に日本庭園と一体となった心地よい空間となっています。まず、表玄関に入ると竹藪が続き、お茶席に向かうような感覚となります。その静けさによって、美術品に出会う心の準備の空間が設けられています。その角を左に曲がると、目の前には全面素晴らしい日本庭園が広がります。お庭の池は、周りからのわき水で出来た自然池であり、人工的なものではありません。

根津美術館には作品を楽しむ順路というのがありません。これは意図したことで、美術館に足を踏み入れたあとは、お庭から楽しんでも良いですし、仏教彫刻から見ても、暫くロビーで雰囲気を楽しんでも良い。そこに集う人々の気分によって自由に見て回れるように配慮されています。入口にはオリジナル商品をそろえるショップがあり、これが先に目に入る事で、人々は感覚的にどのくらいこのギフトショップで過ごすか計算し、全体の滞在時間を配分されているようです。ここにそろえる商品の品質はとて高く、その一つ一つが小さな美術品。お土産にいただいたら幸せ気分になれるセンスの良い商品がそろっています。

展示について

展示品については年7回、その作品を変えて展示しています。毎回作品の横に添えられる説明書きのパネルの内容は吟味され、学芸員の方とネイティブの方々とで何度もやり取りされてやっと出来上がるものです。このパネルの内容については、白原先生が海外の美術館に7年勤務してきた経験を活かし、納得のいくまで変更に変更を重ね、作品を本当に楽しんで頂けるように願いを込めて作り上げた自信作だそうです。

海外の美術館リピーターは、常日頃からそのようなレベルの高いパネルと共に作品を楽しむことが日常となっています。そんな方々に恥ずかしくないパネルを作ることを大切にしています。

特徴

先にも書いた通り、順路を決めていない美術館です。

日本庭園には自然の光とお庭の風景を身体全体で体感できるようなカフェもあります。

この空間も含め、美術館全体をゆっくりと時間をかけて楽しんで頂けます。

展示作品を収納しているガラスケースには配線の存在が外からはわからないように作ってあります。新しい技術によりガラスケースの角に埋め込んであるのです。

美術館と最新の研究の融合により、美術品の本来の美を最高に表現できるLEDライトが採用されています。作品ライトが暗いと感じるところもあるかと思いますが、これは、その作品が一番美しく見える明るさが計算されてのことなのです。

日本画について

美術館に対して人々は「どうして短期間しか公開しないのか」というような疑問を抱く作品もあるかと思えます。

西洋画も勿論ですが、日本画、東洋の作品は非常に酸化しやすいという弱点があります。本来は空気に触れさせる事もできない作品があり、それぞれの作品について公開できる期間が定められています。

そんな作品を、それでも多くの人に観てもらいたいと考え、より多くの美術館で短い期間を更に区切って公開するということになるのです。

地域との関わり

本来美術館は地域と密接に関わりをもち、近隣の方々に何度もお越しいただけるようになることが喜びなのです。レ・クレドールジャパンが世界との関わりを大切にしているということでお話しをしますが、海外の美術館では小学生位から教師が生徒を美術館につれて来て、実際の作品を見ながら解説をしたり、考えを発言させたりする光景を良く見かけます。気に入った作品があると作品の前で座り込みスケッチしたり、調べ物を始めたりととても自由に、そして深く作品と関わりを持っています。

根津美術館のめざすところ

根津美術館もそのような存在になりたいと考えています。

この青山という土地で、現代アートともいえるデザイナー達のショップをすぎると突然「和」の美術館が現れる。その地域そのものが既にアートであると考えています。

3月11日、本来であればI S S E I M I Y A K Eがデザインした杜若のドレスの発表と根津美術館のお庭の杜若がコラボレーションしたイベントが行われる予定でした。

大震災となってしまったため、イベントを行うことはできなくなりましたが、地域と共に地域に根差した美術館でありたい。

もともと一個人の私邸であった根津美術館はそう考えています。

報告 桃井忍